

平成26・27年度 昭島市教育委員会研究指定校
平成27年度 オリンピック・パラリンピック教育推進校

特別支援教育の視点を踏まえた 指導の充実

昭島市立多摩辺中学校



はじめに

校長 喜多野 雅司

学校に求められている使命、それは生徒一人一人に確かな学力や豊かな心を育みながら、自立・共生のための力（生きる力）を醸成していくことです。そしてこの使命を果たしていくには、太陽に向かって伸びていく草木のように、どの生徒にも「希望」という明かりを届けながら、自信や勇気を抱かせていくことだと思えます。

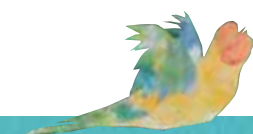
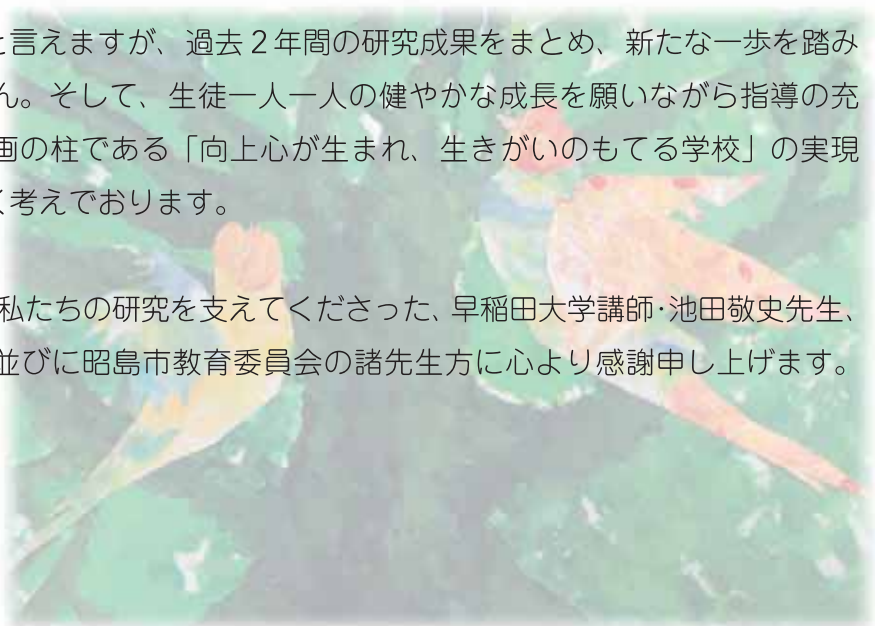
一方、今日の学校現場では、生徒が抱える発達上の課題をきっかけとして、不適応をはじめとする諸問題が広がり、深刻化する状況にあります。そのため、私たち教師も、大小様々な荷物を抱えながら過ごす生徒をサポートできるよう、学習・生活環境の両面で質的な向上を図りながら奔走する毎日です。

本研究では、そんな私たちの思いを確かな形で生徒のもとに届けられるよう、「昭島市教育委員会研究指定校」の指定を受け、平成26年度より2ヶ年計画で生徒の発達上の課題に焦点を当てて研究を重ねてきました。その進め方は、「特別支援教育の視点を踏まえた指導の充実」をテーマに、日頃の観察やアンケート調査を通じて生徒の状況を把握・分析し、その結果を学習指導や適応指導に活用しながら、より望ましい学習・生活環境を創造していくというものです。

また、これと併行して、昨年度に発表された昭島市立拝島第四小学校の校内研究（通常学級における特別支援教育の充実）の成果を参考にするとともに、心理をはじめとする各領域で指導・助言を受けて研究を進めてきたところです。

研究はまだ始まったばかりと言えますが、過去2年間の研究成果をまとめ、新たな一歩を踏み出していかなければなりません。そして、生徒一人一人の健やかな成長を願いながら指導の充実を図り、本校の学校基本計画の柱である「向上心が生まれ、生きがいのもてる学校」の実現に向け今後も研鑽を重ねていく考えであります。

最後になりますが、これまで私たちの研究を支えてくださった、早稲田大学講師・池田敬史先生、臨床心理士・木内絵莉子氏、並びに昭島市教育委員会の諸先生方に心より感謝申し上げます。





2年間の研究の流れ

平成26年度

一学期

6月 生徒アンケート

授業研究

年間を通じ、以下の流れで教科指導のあり方について、研究する

事例検討

週ごとに定例会を設定し、関係機関と連携しながら支援策を検討する

8/27
◎講義
木内絵莉子氏
「子供の心のSOS」
～理解と支援～

二学期

11月 生徒アンケート

実態把握

授業実践

検 証

1/27
◎講義
池田敬史先生
「特別支援教育の視点を踏まえた授業」

三学期

平成27年度

一学期

6月 生徒アンケート

授業改善推進プランの作成

教員相互による授業観察 & 意見交換

5/27
◎勉強会
池田敬史先生
「池田敬史先生を囲んで」

二学期

教職員意識調査①

11月 生徒アンケート

教職員意識調査②

実践 & 検証

10/14
11/17
1/21
◎授業観察
◎演習
◎講義 他
池田敬史先生

三学期

校内OJT研修

成果と課題のまとめ

主題設定の理由

中学校は本来、生徒たちが義務教育の最終場面において、様々なことを体験し自己の能力に目覚め、生き生きと活動する場所である。様々な悩みも教員や友人、家族などの協力の下で乗り越え、希望と活力に満ちていなければならない。しかし、現在、中学校における教育現場では、「中1ギャップ」に代表される不適応や学力不振、コミュニケーション能力の低下や発達障害のある生徒への対応などの課題を多く抱え、日々その課題解決に奔走する状況にある。生徒にとっても、学校が生き生きとした学びや友人との語らいの場から遠ざかり、決して居心地の良い所とは言えなくなってきている。



本校では、ここ数年に渡り「基礎学力の定着」を図るため、指導法の改善や向上に取り組んできた。そこから浮かび上がってきた課題は、特別な支援を要する生徒をはじめとした、『個』に対して我々が理解と対応力を身につけるといったものであった。本校の生徒は、真面目に授業に取り組む生徒が多い反面、教師の指示を理解できない、見通しをもてないため作業が進められない等、支援が必要な生徒もいる。そのため、昨年度より「特別支援教育の視点を踏まえた指導の充実」という研究主題を設定し研究するものとした。

特に、今年度は全教職員で共通して実践する授業スタイルの確立を目指し、『多摩BASE』として掲げた。それは、Ⅰ集中できる教室環境を整える、Ⅱ見通しをもたせる、Ⅲ具体的な指示を出す、という3点である。教師が自ら学び、様々な課題を抱える生徒への理解や指導力の向上を図ることが、『授業力』や『人間力』を磨くことにつながっていき、これらのことを実践していくことで、生徒の心を耕し力を伸ばしていきたい。

多摩BASEの確立

多摩BASE

- Ⅰ 集中できる教室環境を整える
- Ⅱ 見通しをもたせる
- Ⅲ 具体的な指示を出す





I 集中できる教室環境を整える

- ◎ 掲示物の工夫
- ◎ カーテンの設置
- ◎ ロッカーの整理整頓
- ◎ 余計な掲示物の排除 など

【例】 教室前方の棚が雑然としており、視界に入り集中できない生徒も。



カーテンを設置することで、視界を遮り黑板に意識を向けさせる。



教室前方の壁に、多数の掲示物が貼ってあるため、そちらに目が向いてしまう生徒も。



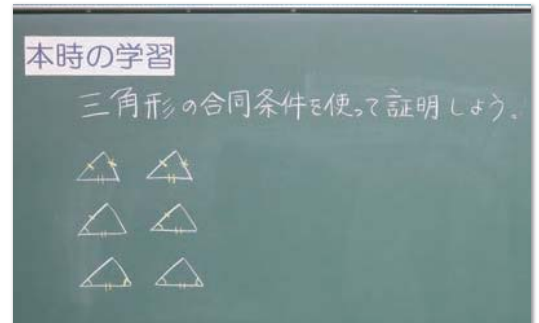
前方の壁には極力掲示物を貼らず、黑板に意識を向けさせる。



II 見通しをもたせる

- ◎ 『本時の学習』の提示
- ◎ 本時の流れを確認させる
- ◎ 作業時間の目安を提示
- ◎ 短期、中期、長期の学習内容を意識づける など

【例】 全教科で共通して、授業の導入で「本時の学習」を掲示することで、その日の学習内容の見通しを生徒に持たせる、学習に対する不安や混乱を取り除く工夫を行う。また、段階的に何を行うかの具体的な指示を事前に出す。



III 具体的な指示を出す

- ◎ わかりやすい言葉かけ
- ◎ 的確な指示の工夫
- ◎ 指示を出すタイミングの工夫
- ◎ 図示等の視覚的教具の活用 など

【例】 口頭での指示ではなかなか内容が理解できない生徒のために、図などを使用することで、視覚的な認知を図れるような工夫を行う。また、調べ学習などではレイアウトの見本を提示し、文字の大きさや書式などについて具体的な指示を与えた。



授業実践による生徒の変容

第1学年

- 無責任な言動が多く、勉強に対して無気力。



部活動に入部し、顧問からの手厚い指導を受けるようになったことで、大人や友だちとの関わり方が大きく変化した。

◎言葉遣いも丁寧になり、勉強についても意欲を見せるようになった。挨拶を欠かさずするようになった。

- うまくコミュニケーションが取れず、見通しがもてないと不安になり体調不良になることもある。



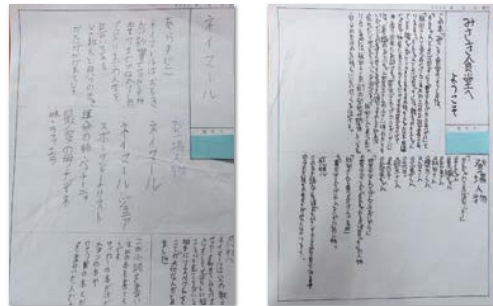
見通しをもたせるために、何かをする時には今後の流れを予め伝えるようにした。体育の授業は、本人のペースに合わせることで拒絶感が少しずつ減ってきている。

◎不安なことや見通しをもてないことを担任に相談できるようになり、保護者を通して話を聞くことで安心するようになった。体育の授業には一切参加することができなかったが、少しずつ見学することができるようになった。

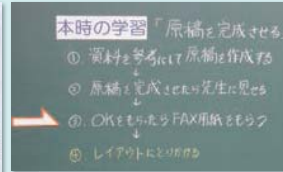
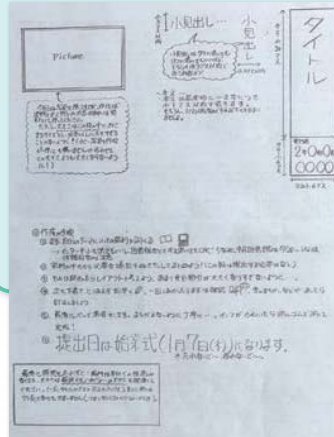
第2学年

右の作品は夏休みの宿題として行ったものである。字の大きさやレイアウトが生徒個々によってバラバラであり、見出しが大きすぎたり余白が多く見られる。

- 字の大きさがバラバラで、余白も多い。
- 提出も遅れてしまった。



【具体的な指示の例】

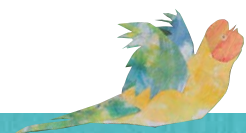


多摩BASEのうちの2つ(Ⅲ・Ⅳ)を意識して指導に取り組んだ結果、同じ生徒の作品が数ヶ月の間に下記のように大きく進歩した姿が見られた。この結果は該当生徒だけでなく、多くの生徒に共通して見られた。

教員の指示の仕方次第で、生徒たちは大きく成長する余地をもっていと改めて再認識した。



◎字の大きさが整い、見出し等も見やすい。
◎レイアウトが良くなり、余白が少なくなった。





第3学年

- 基礎学力が低く、分からないことが多いため学習意欲に欠ける。
- 家庭学習の習慣が身についておらず、授業中に理解できたことでも定着が難しい。
- 学習の仕方が分からず、どのように質問したらよいのかも分からない。



個別の課題を渡し、1学年からスモールステップで復習できる課題に取り組ませた。

課題の一覧表を表紙につけ、どこまで身につけられたか一目で分かるようにした。

(多摩ベース Ⅳ：見通しをもたせる)

毎日課題を提出させ、その日のうちに返却した。質問がたまってきた頃を見計らって、質問日を設定し、問題への取り組み方や、やり直しの仕方を具体的に指示するように心がけた。

(多摩ベース Ⅳ：具体的な指示を出す)

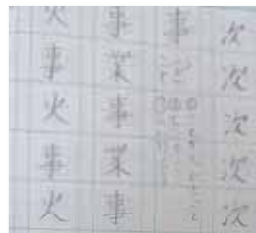
- ◎理解できることが増え、自信に繋がった様子。今まで白紙同然だったテストでも多く記入できるようになった。
- ◎家庭学習の習慣が出来てきた。授業の宿題も提出するようになった。
- ◎人目を気にして質問することを嫌っていたが、周りに人がいても説明に耳をかたむけられるようになった。

多摩辺学級

- 字を書くことが苦手で字形が整っていなかった。



絵を描くことが好きだったため「字を絵としてとらえて模写してみよう」とアドバイスし、くり返させた。



- ◎字のバランスが整ってきた。

- 体力がなく、1.5kmも走るのがやっとだった。3kmになると泣いてしまい走る事ができなかった。



個人カードを作成し、目標を設定して達成したら塗り絵をさせていき、意欲を高めた。



- ◎マラソン大会では見事 3km を完走することができた。

本校の特別支援教育推進委員会の取組

構成メンバー

副校長	生活指導主任	特別支援教育コーディネーター
養護教諭	スクールカウンセラー	各学年より1～2名、特別支援学級担当者

*月に一度、市の教育相談室のSSW（スクールソーシャルワーカー）が同席する。

活動内容

(1) 生徒の情報交換・支援の経過の報告（週に1度、1時間の定例会）

- ①子供の課題に合わせた支援の検討
 - 担任や教科担任からの相談 → 具体的なアドバイス、保護者面談実施のケースは対応を確認
 - 保護者からの相談の対応 → 必要な支援の検討
- ②SC及び外部機関との連絡・調整
 - 専門機関の紹介（市教育相談室、子ども家庭支援センター、医療機関、児童相談所など）
 - ケース会議の実施（子ども家庭支援センター、SSW、医療機関など）
- ③個別の教育支援計画・個別指導計画の作成と活用方法
 - 対象生徒の検討 → 保護者と本人の意志確認
 - 具体的な支援の実践と検証、次年度への引き継ぎ → 学級担任作成

(2) 進路選択についての教職員への情報提供

- ①進学や就労に向けた支援の充実
 - 特別支援学校及びサポート校の学校説明会、体験入学の資料配付、出願までの流れの確認
 - 保護者・教員対象の勉強会の案内配布、就労相談（一人一人の適性を判断し、職種を選択）
- ②手帳申請に向けての助言
 - 教育相談から就学相談へ

(3) 特別支援教育の視点をテーマとした教職員研修の実施

- ①生徒理解研修・校内OJTの実践
 - 支援を要する生徒の実態把握 → 毎年、4月下旬に実施
 - 授業方法の工夫と改善点を検証（校内OJTの実践）
- ②チーム支援の取り組み方
 - 養護教諭、学習支援員、部活動や委員会担当者等の連携
 - 外部機関との連携



(4) 学習支援教室の管理・運営

- ①学習支援教室入室手続き
 - 本人及び保護者の面談 → 委員会での検討・判断
- ②学習支援の個別指導内容検討
 - 本人や保護者の願いを配慮した学習指導
 - 個別指導計画と関連させた指導

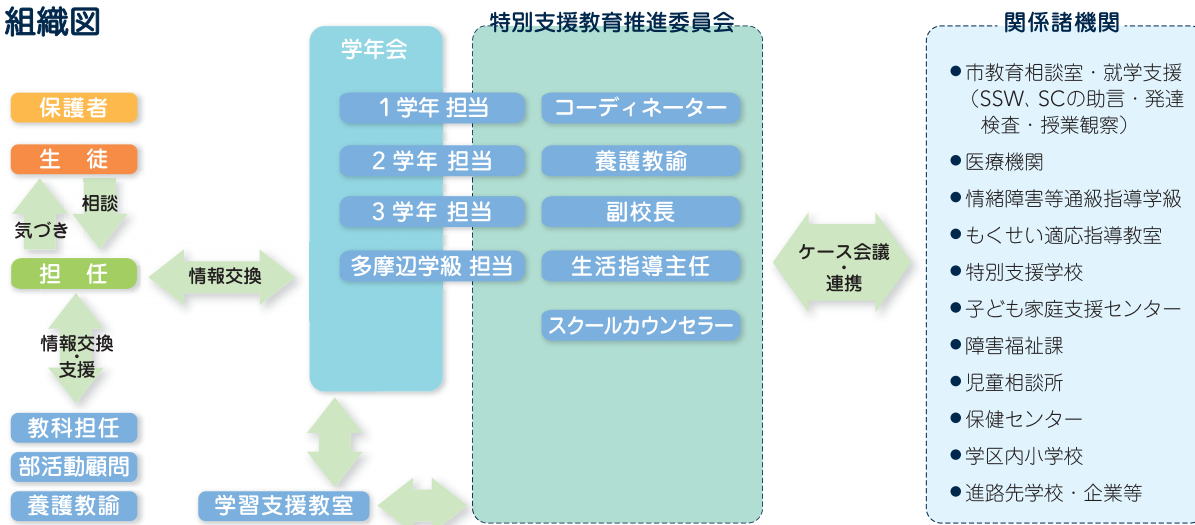
(5) 交流事業

- ①副籍交流の連絡・調整
 - 特別支援学校との日程、交流内容などの確認
 - 定期的な授業参加
- ②特別支援学級と通常の学級との交流
 - 給食交流 → 毎年、第1学年で5月に実施
 - 『親学級』の実践 → 通常の学級での授業参加を希望し、可能な生徒が対象





組織図



個別の支援の実践

様々な事情で通常の学級・特別支援学級のための教育活動だけでは支援が行き届かない場合、特別支援教育推進委員会では、本人や保護者の希望、支援に携わる学年・担任の考え、SCのアドバイス等を総合して、個別の支援を実施している。

(1) 特別支援教育支援員の授業配置

今年度は授業に特別支援教育支援員を配置し、全体指導の中では質問しにくい生徒に対して、机間巡視をしながら丁寧に対応している。実技教科では目が行き届き、やる気はあるが一人ではできない生徒の支援が充実した。

また、学習支援教室にて個別の学習支援も行っている。学習の支援だけでなく、コミュニケーション能力の向上、登校支援の場として特別支援教育推進委員会が必要と認められた生徒が1日1時間を限度とし利用している。支援内容については、支援員が実施報告書を作成し、担任、コーディネーター、教科担当等が閲覧できるようにファイリングし、保存をしている。

(2) 日本語指導員の配置

日本語が理解できない外国籍の生徒に対して、放課後の日本語指導や授業支援・取り出し授業を行っている。人材確保が課題ではあるが、グローバルスクールと連携したケースでは学習内容や教材も個々のニーズに合ったものを準備することができた。また、生活様式の違いによる『日常の困り感』も学校が把握でき、支援に役立てることができた。指導員によるタブレットを活用した講義は視覚的にもわかりやすく、意欲の向上にも繋がっている。また、日本語や学習内容そのものの理解を促し、支援の成果が顕著に表れている。

(3) 『親』学級での支援

通常の学級と特別支援学級の直接交流を希望する生徒に対して、授業と一緒に取り組む、『親学級』での授業交流を行っている。事前にケース会議を設け、配慮すべき点や支援内容を確認した上で実施しているが、特別支援学級に在籍する生徒の進路が多様になり、今後も30～40人規模の生活トレーニング、受験に向けての学習支援をすすめていく上でも『多摩BASE』の充実が求められる。



自立に向けて

この2年間『特別支援教育の視点を踏まえた指導の充実』というテーマを掲げ、特別支援教育推進委員会として、困難を感じているすべての生徒を対象に学力や生活課題の現状を踏まえ、支援の方策をいろいろと検討してきた。学校全体として掲げた『多摩BASE』は、その実態に学校が寄り添い、全教職員が共通してできることを実践していかうと掲げた合い言葉である。短期間ではあったが、特別支援教育の視点をもって環境整備や学習指導に臨んだ成果は、校内OJTの振り返りでも挙げられているように顕著に出てきている。一見、画一的な支援で個々に対応していないようにも感じるが、学年や学級単位でこれだけは守ろう、気をつけよう、という取り組みは集団としての力を養い、秩序ある生活基盤は個々の基本的な生活習慣や社会的な生活習慣の定着にも繋がっていく。また、学習指導においても「わかった。」「できる。」という成功体験は学びに向かう態度を向上させ、自分で取り組もうとする姿勢も芽生えてくる。

誰もが学べる環境と支援について、様々な角度から具体的な方法を考え、検証していく中で子供たちの『生きる力』を育むことに繋がることも実感できた。『多摩BASE』は、その場限りの支援ではなく、自立に繋がる支援として全教職員で更に研修を深め、生徒一人一人の充実した学校生活を目指していきたい。

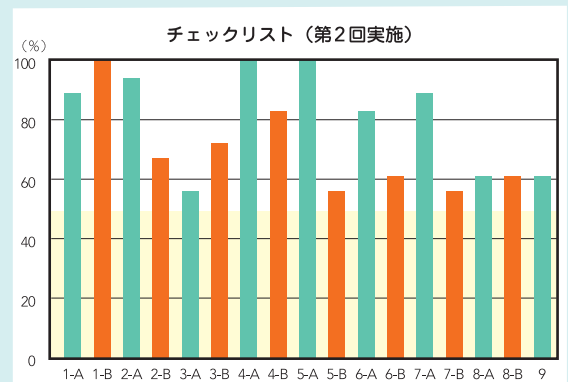
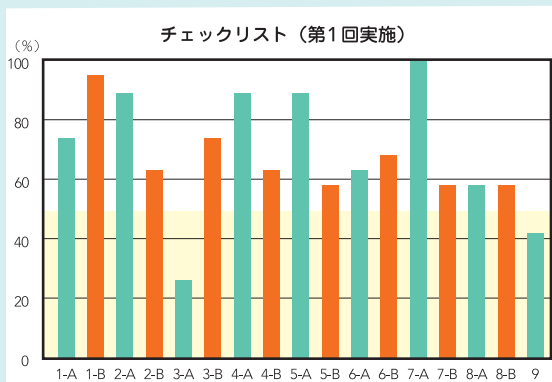
教職員意識調査

本校では、通常の学級における「特別支援教育」の視点を取り入れた授業作りを進めていくうえで、平成26年に岡山県がまとめた「岡山型学習指導スタンダード」から、教員側がどの授業でも大切にしたい「特別支援教育」の視点を、教員アンケートを通じ、「環境」「授業」「その他」の面で振り返った。

実施したアンケートは、原則として、それぞれの項目は、次のような2通りで構成している。

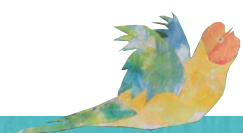
- A** 特別な支援を必要とする子供だけでなく、すべての子供に対して
- B** 特別な支援を必要とする子供に対して

- 1-A** 授業に関係のない、トロフィーや賞状、写真などに視線や気持ちが向かないよう教室の環境に配慮していますか。
- 1-B** 授業の準備ができていない子供に声をかけるなどの支援の手だてを考えていますか。
- 2-A** 子供たちの学習状況に応じて、「聞く」、「書く」などの活動を使い分ける工夫をしていますか。
- 2-B** 板書を書き写したり、メモを取ったりするのが難しい子供への支援の手だてを考えていますか。
- 3-A** 学習課題（めあて）を黒板に提示していますか。
- 3-B** 集中力が続かなかったり、学習の手順がつかみにくかったりする子供への支援の手だてを考えていますか。
- 4-A** 考える視点や道筋を示していますか。
- 4-B** 子供たちのつまづきのパターンを把握して、そのパターンに応じた支援の手だてを考えていますか。
- 5-A** 活動の目的や手順を子供たちに示していますか。
- 5-B** 活動に参加しにくい子供への支援の手だてを考えていますか。
- 6-A** 学年や時期、定着度に合わせて発表の話型を変えて示していますか。
- 6-B** 友達の発表を聞けない子供や、話し始めたら止まらない子供への支援の手だてを考えていますか。
- 7-A** 学習した内容が明確になるように、子供たちが確認したり、振り返ったりする場を設けていますか。
- 7-B** 確認したり、振り返ったりするのが難しい子供への支援の手だてを考えていますか。
- 8-A** 家庭学習の内容が子供一人一人に伝わるような工夫をしていますか。
- 8-B** 何をしようのかわからない子供への支援の手だてを考えていますか。
- 9** ティームティーチングや支援員などが入った授業では、それぞれの人の役割を明確にし、また、相談する方法を決めていますか。



アンケート対象：昭島市立多摩辺中学校教職員 19名

実施時期：平成27年10月（第1回目）・平成27年12月（第2回目）





生活アンケート(生徒対象)を受けて

6月と11月に行った生徒へのアンケートの集計結果を見ると、少しずつではあるが学習への取組姿勢に前向きな面が伺える。例えば、「授業に対して、全ての教科に意欲をもって取り組んでいる」と答えた生徒の割合は6月の25%から11月には27.4%と2ポイント上昇した。同様に、「授業中、必ずノートをとるようにしている」「授業中、内容がわかり、できたことをうれしく思うことがよくある」といった項目についても、2ポイント程度上昇していることがわかった。

全校で『多摩BASE』を意識した取り組みを行ってまだ日が浅いとはいえ、その成果だけとは言えないかも知れないが、教員一人一人が自分の授業を見直し、改善を意識した成果が少しは表れたのではないかと考えられる。



成果と課題

成果

- 『多摩BASE』を提唱し、教職員に対するアンケートを行ったことにより、特別支援教育に対する教職員全体の意識と理解が高まった。また、授業力の向上につながった。
- 定期的に校内OJT研修を実施したことにより、若手教員のスキルアップにつながった。
- 多摩BASEの①を意識したことで教室環境が整備され、学習に集中し気持ちよく授業を受けられるようになった。
- 人とコミュニケーションをとることが苦手な生徒の中で、それが改善した事例がいくつも見られた。結果として学校の居心地の良さが高まったという生徒が増えた。
- 教員が的確な指示を心がけたことにより、新聞づくりのレイアウトや文字の大きさ等が整い、作業の進行がスムーズになった。そのことで多くの生徒が達成感や自信をもつこととなり、自己肯定感の高まりが見られた。

課題

- 若手教員は年々増加の一途をたどっている。校内OJTによる成果により、若手教員のスキルアップが認められた反面、関わった教員の負担にも偏りが見られた。今後は時間設定や対象者についても精選していく必要がある。
- 授業の中でICT機器や図示等の視覚的教具を活用する教員はまだ少ない。今後は機器を充実させ、視覚的にもわかりやすく、見通しをもたせやすい教具の工夫が求められる。
- 生徒の学習意欲を向上させるために、授業や友達との関わりの中で、成功体験や認め合う体験をより一層積み重ねることができるよう工夫していく必要がある。
- 問題解決のために前向きに取り組む生徒が多い反面、生徒同士の学び合いは少ない。主体的に学び、高め合える授業づくりが課題である。

研究に携わった教職員

【校長】 喜多野 雅司

【副校長】 井上 春好

石阪 智治	一条 峰夫	岩永 英樹	岡部 美和	小野 亜紀	川手 一翔
菊田 晶	木村 志保	梶 康浩	向坂 正恵	小林 秀雄	坂入 恵美
杉山 典子	袖山 伸男	高田 圭祐	瀧日 あゆか	武居 裕之	田上 裕
田村 啓二郎	中平 翔	播摩 賢一	古畑 孝太郎	堀田 典子	前川 法彦
真船 由妃	水野 愛美	吉村 史			

